



《増田れい子の本③》

一本のペン

私は何を
書いてきたか

《増田れい子の本③》

一本のペン

私は何を
書いてきたか



増田れい子（ますだ れいこ）

1929年東京生まれ。

1953年東京大学文学部国文学科卒。

同年毎日新聞東京本社入社。社会部、サンデー毎日編集部、学芸部編集委員などを経て82年「女のしんぶん」編集長、83年大手紙初の女性論説委員に、84年度日本記者クラブ賞受賞。91年よりフリージャーナリスト、エッセイストとして活動。

主な著書『インク壺』暮しの手帖社、『白い時間』講談社、『沼の上の家』『ひとを愛するということ』労働旬報社、増田れい子の本①『花のある場所』②『わたちの歌声』大月書店、住井すゑ『わが生涯』（きき手増田れい子）岩波書店など。

一本のペン

増田れい子の本③

1995年2月20日第1刷発行

定価はカバーに表示してあります

著者◎ 増田 れい子

発行者 平 智 享

〒113 東京都文京区本郷2-11-9

発行所 株式会社 大 月 書 店

印刷 太平印刷
製本 中條製本

電話(営業)3813-4651(編集)3814-2931 振替 00130-7-16387

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください

ISBN4-272-60043-5 C0395

増田れい子の本③
一本のペン／目次

序章 一本のペン……

5

第一章

11

- (1) 沼のほとり 12
(2) 入社式 17

第二章

27

- (1) おとくさん 28
(2) ちいさな秘密 36

第三章

39

- (1) 壁 40
(2) ペンダント 48

第四章

55

- (1) ヌマさんの一滴の血 56
(2) 谷間の百合 67

第五章

73

- (1) 音 74
(2) 女の抗議 82

第六章

91

- (1) サー・ローレンス・オリビエ 92
(2) シモーヌ・ド・ボーボワール 99

第七章

107

- (1) 取材そして取材 108
(2) 黒い雨 118

第八章 133

第九章 163

第十章 183

第十一章 207

第十二章 221

第十三章 241

(3) キーパーソンと花森安治 124

(1) ひとの森へ 134

(2) ひとに言葉あり 140

(1) 映画『橋のない川』 164

(2) 世界七都市八百品目の価格調査 171

(3) 女と戦争 176

(1) 沖縄にあう 184

(2) 沖縄戦の記録 191

(3) 蓮見喜久子さんのこと 199

(4) 沖縄本土復帰 202

(1) 百年の旅人たち 208

(2) 負けんまい負けんまい 212

(1) 重い布 222

(2) 因果と一撃 232

(1) 世界の女の憲法・女子差別撤廃条約 242

(2) コペンハーゲンの夏 247

(3) 市川房枝さん逝く 259

第十四章 271

(1) 論説委員室にて 272

(2) 日本記者クラブ女性初受賞者となる 277

(3) 傍聴席の涙 283

第十五章 289

(1) 戦争と私 290

(2) 夫死す 297

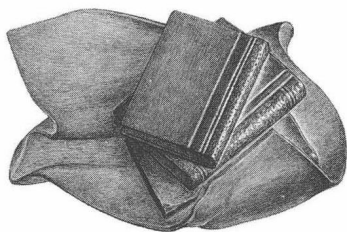
(3) 従軍慰安婦問題 306

(4) 一九九一年四月一日 319

終章—あとがきを兼ねて— 327

カバー・本文挿画 装幀 田中淑恵
渡 まゆ

序 章 一本のペン



一本のペンをにぎりしめて生きてきた。

この手にそれがもつとも似つかわしかったかどうかは、いまもってわからない。

ペンは鋏であるべきだったかも知れない。

メスであつてもよかったのかも知れない。あるいはまた、針がふさわしかったかも知れない。

しかし、実際に私のこの手ににぎられてきたのは一本のペンであり、長年の間にそれは私の肉体の一部になつたらしい。

こころというのは、私の経験では極めて不安定、かつふらふらと浮遊がちで、もの見高く、矛盾するのにも平気で、要するに無頼である。

それは、多分こころというものの本性で、こころというのはそんな風にしてしか存在しないし、また豊饒にもなれないしろものなのだろうと思つてゐる。

そうして私の場合、クチというのは、この無頼なこころとツウツウで、しばしばクチはこころの奴隷役をつとめ阿諛追従^{あゆつしやう}にはげむことがある。かと思ふときとしてこころの不足不備を補つて優等生的発言に変える有能なる官僚の如くに振る舞ふこともある。

つまり、クチというのは詐欺師そっくりなのだ。

ところが、この手ににぎりしめられたペンは、こころの雲、口舌のしぶきを排して私の岩盤から真水を汲みあげるふしぎといえばふしぎな道具になつてゐる。

ペンを通したとき、私はまっ正直になつてゐる。ウソが言えない。自分を偽ることができない。

もちろんそれはあくまでも自分にとっての真実の汲みあげであつて、わが真水よりもすぐれて甘露

な名水がそれこそ無限に存在することは、言をまたない。

しかし、ともかくも、この五本の指に支えられたペンは、あやふやなわがこころの妨害を突き抜け黙らせ克服して、岩盤の奥深くを探りそのときどきに何かあらたな発見を成しとげてきた。

新聞記者を三十八年、その後フリーになって三年、通算すると四十一年のペン暮らしをしてきた計算になるが、その間に記したものは、すべて私にとっての「真実」に他ならない。

もつとも、それがこの世の「真実」であるかないかはわからないし、多くのひとに受けるかどうかはまったくわからない。わからなくて一向に構わないし、何らかの評価を受けたいとも思わない。

ペンを持つとき、私はそのようなことを一切顧慮しなかったし、ただひたすら「真水」を汲みたいと志し、自分を追いつめただけのことだ。

自分が汲み、それを飲んでそしていのちをつないできた、ということなのだろうと思う。

その水がなければ私はここまで、ペンと共に生きてくることはできなかったと思う。

その水であるが、それは私がひとりで湧かしたもので何でもない。

水をたたえた岩盤は、タテにもヨコにも外界とつながっている。タテとは過去から現在に至る地球のきざんできた時間、歴史であり、ヨコとはその時間のうちにかつて生きてきたひとびと、いまを生きているあらゆるひとびととつながっている。

私の岩盤には、地球と人間のすべての歴史と文化が組み込まれている。それなくして私という一つの肉体も精神も存在し得ない。

私というのは、この地球上のある一かくに生えた小さな草にもつともよく似ているもののようなのだ。

その草は生きゆくためにその小さな根を大地に伸ばして、岩盤から伝わる清冽な水を汲みあげつつ、よろこびや悲しみのうたをうたい続けるのだ。

私という小さな草は、一九二九年一月五日にアジア大陸の東方に弧状をなす日本列島に生まれ出た。ご多分に洩れず、世界は激動していた。ムツソリーニが力を持ちはじめていた。毛沢東と朱徳は長征の旅についていた。ソ連の第一次五年計画はその前年からはじまった。十月、暗黒の木曜日を期して世界恐慌が見舞った。ハイチでは反米活動しきりであった。

嵐はすではじまっていたというべきだろう。日本もゆれ動いていた。

三月、治安維持法改正案（国体ニ天皇支配体制ニ変革を目的とする結社や指導者は死刑に処す）国会通過、その日（五日）この法案に反対してたたかった労働党代議士山本宣治が右翼の凶刃にたおれた。

前年、満州の権益を守るため日本陸軍は張作霖を爆殺した（いわゆる満州某重大事件）が、その事後処理をめぐって天皇裕仁の不興を買った田中義一首相は辞職、浜口雄幸内閣に交替。浜口内閣はのち金解禁にふみ切る。不景気風強まり、小津安二郎監督の映画『大学は出たけれど』に世相が集約された。サントリーウィスキー登場、工場法がようやく改正されて女性と年少者の深夜業が禁止されるようになった。島崎藤村は『夜明け前』を発表、小林多喜二の『蟹工船』は発表たちまち発禁となった。東京、下関間にはじめて特急富士と桜が走り、日比谷公会堂オープン。

私の父、犬田卯（いぬたしげる、一八九三―一九五七）は、農民文学運動に没頭していた。全国農民芸術聯盟（規約第一条には、我が聯盟は無産農民の階級的立場からブルジョア芸術及び凡ての都会芸術^{すべ}に対して全国的に農民芸術の戦線を張り、且つ来るべき社会の基礎的文化たる農民芸術を確立発展さすことを目

的とする、とある）の中核にあつて、機関誌『農民』を発行、論文を発表していた。

私が生まれたころ、父が執筆していたのは第三次『農民』の第一巻第一号の巻頭「生活行動としての農民芸術」であらう。

父にとつて、農民とは（地主ではない。実際に土地を耕しいのちを育むひとびと、男や女）現今資本主義社会の最底辺を成し、もつとも悲惨、もつとも損な立場におかれている。しかも彼らは社会日常に不可欠な生活資料の原生産者である。農民芸術は何よりもまずこれら最底辺の人間の正義の叫びであり同時にそこから脱出しつつ、資本家権力者を頂点とするピラミッドを解体するという積極的行動を芽生えさせる力となるものである——（同論文）との認識があつた。

母もまた産後の何日かの中には起きあがつて私の寝顔をのぞきながら、書くべきことをあれこれ算段していたのではあるまいか。

一九二一年に小説『相剋』を発表し、その前後に父と結婚。ペンをふるいつつ、一九二三年に章を、二六年にかほるを、二九年に私を出産、翌一九三〇年からは高群逸枝、望月百合子氏らと共に雑誌『婦人戦線』を創刊、小説、評論、女性論を毎月のように発表している。また、同じ三〇年四月から十月にかけて読売新聞懸賞小説に一等当選した作品『大地にひらく』の同紙連載がはじまっている。

……赤ん坊の寝顔を見ていると、ひとりでに涙があふれてくる。この子の行く末は……と思うと不安が押し寄せ、それがいつしか涙に変わっているのだ。貧しい家庭に生まれた子をこの社会は決して幸せにしない、それは自分自身の目がよくよく見てきた現実である。このままの社会では、生まれた子は確実に不幸を背負わされる。

……このとき、母の子を愛する心情は発火する。この子を幸せにするために、何をなすべきか。生まれ来る子をにぎりつぶそうとするこの社会の在りようというものを変革すること。母性愛は社会を変える情熱に姿を変えるのだ……と母は私を出産したのちに書いている（『婦人戦線』第一巻第九号、「貧しき母は叫ぶ」）。

私という小さな草がいのちを与えられてから六十五年、それは地球人類の歴史の時間のなかのほんの一瞬に過ぎないのであるが、その一瞬は歴史と社会、自然と人間の岩盤によって支えられている。私はそこに根ざし、そこに生きて、やがて死んで滅する。そのあとにまたいのちの野草は芽生えるであろう。

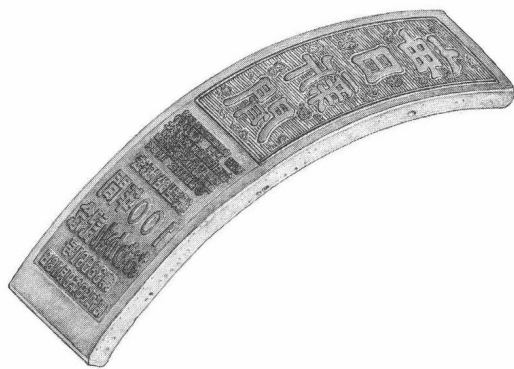
ただ、私が死滅したあと、そこは豊饒でいのちが豊かにいとなまれていくであろうか。私がいのちを生きたあとの土壌は荒廃するであろうか。心配といえばこのことだけが、心配である。

できれば、私という草が、岩盤から美しい清い水を汲みあげつつ、花を咲かせやがて枯死したあとに、美しく清い水と等価の何かいのちを豊かに育む諸要素を、岩盤に戻すことができたならば、即ち、私のペンが、私のペンを肥やしてくれた岩盤や土壌を荒らすのではなく、豊かにするために、少しでも役立つのであったら、ペンの汗は、寶石にもまして光りかがやくことだろう。

夢といえばまさにそれが私という草の夢である。

思えばその夢だけが、この四十一年のそしてこれからの歳月を生きてゆく私の、大いなるよりどころなのである。

第一章



(1) 沼のほとり

雨が降っている。

ふるさとの家を取りまく丈高い樺や榎、朴の木、杉の木、桜の大樹に雨は弾むように降り注いでいる。記録破りの炎暑に耐えてきた木々とひとの上に、四十日ぶりで雨の癒しが到来した。

樺に降る雨の音と、杉の木を濡らす雨の音にはきつと微妙な音質の差があるに違いない。受けとめる葉の大きさやかたち、厚薄の差によって、雨音は変わるだろう。楽器によって音のニュアンスが異なるように。

たくさんの木々にかこまれたふるさとの家で聞く雨音は、東京の仕事場で耳にする同じ音にくらべて、はるかに厚味があり色どりが深い。雨音がやさしい音楽になっている。

アスファルトに直接叩きつけられる雨の音は硬いが、木々の葉にはじけ、幹を伝って土におりてくる雨音の総和は、ふくらみのあるころよい楽の音である。

久しぶりの雨をよろこぶのか小鳥がピツコロになってうたっている。赤銅あかの雨どいも軽やかにゴングを打ち鳴らす。

四十一年前、樺も榎も朴の木も、桜も私がこの家を離れて東京へ去る日、そこに葉をひろげていた。

そのころ若木だった桜は亭々たる巨樹に成長し、春四月初旬、家を花の雲でおおってしまふ。

一九五三年四月一日、毎日新聞東京本社編集局に記者として採用された私は、午前十時からの入社式に間にあうよう、沼の上の家をあとにした。二十四歳になっていた。

JR（当時は国鉄であつたが）牛久しき駅から汽車（常磐線）で約一時間、上野駅に着く。山手線に乗りかえて有楽町下車。駅のまん前に毎日新聞社の社屋があつた。いまは有楽ビルになっている。現本社は竹橋のパレスサイドビル内にある。

入社式の朝、私は牛久駅に行かず、ひとつ上野寄りの佐貫駅から常磐線に乗った。当分は見納めになる牛久沼うしくぬまの情景を眼裏におさめておきたいと思つたからである。

姉が編んでくれた白い手編みのセーターにひだのスカートという学生スタイルで沼のほとりぞいに南を目ざせば、自然と佐貫の駅に出るコースをたどつた。四キロほどの道のりである。

誰も私を送らなかつた。これは、私の家のやりかたで誰が出かけるときでもいわゆる「見送り」セレモニイはやらない。セレモニイという形式を嫌う両親は、自分の仕事机の前で、こどもたちが出かけてゆく気配を察しているだけである。もつとも、両親の若いときのことをあれこれ探索してみると双方とも東京へ「出奔」している。つまり親の意にそむいて自立を果たさんと「家出」をしている。

「家出」に「見送り」は邪魔なわけで、両親は自分たちが欲しなかつた「見送り」だから、こどもにもあてはめなかつたのではないか、といま思う。いや単にそんなめんどうなことはしない方針だったのかも知れない。

周囲六里、近隣農家にとつては農業用水であり、そこに住むフナや雷魚やしじみやうなぎは村びと

の蛋白源となり、岸辺にしげるまこもや豊富な藻は田畑の肥料となり、美しい白い花をつける菱や黄色の河骨、鬼蓮まで浮かべた豊饒の沼「牛久沼」、カイツブリやオオバンや白鳥のすみかでもある「牛久沼」を見送り見送られ、私はこれから長いことを過ごすだろう職場へ向かって一步をふみ出した。

一九五三年四月一日朝の「牛久沼」は申し分なく澄みきっていた。沼の面はふくらとやわらかく盛りあがって見えた。岸辺をおおうまこもの群れは淡くきよらかな緑であった。

少し、涙が出た。

私はこの沼のほとりで七歳からの時を過ごしていた。

一九三五年七月三十日、両親ときようだい四人（一九三一年に末子の充が生まれていた）一家六人は、東京杉並を離れ、牛久村へやってきた。沼のほとりの牛久村字城中は、父卯の出生地であり親ゆずりのいささかの農地は妹がついだものの、千坪の家屋敷は父の所有として残されていたらしい。

草ぶき屋根で土間のある典型的な農家が、私たちのあらたな拠点になった。

両親にとってこの帰郷にはふたつの意味があったと思う。

ひとつは「都落ち」であり、もうひとつは「再生」である。杉並の家を根城に父は農民農地農村の解放を目ざして運動機関誌『農民』を発刊していたが、序章で触れたように、私の生まれた年には小説「村に闘ふ」がすでに発禁処分にあっており、そのころから強まってきた治安維持法による言論弾圧は、ますます猛威をふるう様相を示してきた。

父の主張する農村解放は、地主制度の解体変革を主眼とする以上、日本の最大の地主である天皇家